

# INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■会長からのお願い	1
■選挙結果報告	2
■DGDからのお知らせ	2
■第52回(平成6年度 第2回)運営委員会報告	3
■第27回総会報告	4
■第27回日本発生生物学会後記	5
■第27回日本発生生物学会決算報告	6
■大会感想記	7
■岡崎嘉代さんの告別式での弔辞	11
■シンポジウムのお知らせ	13
■研究助成金公募のお知らせ	16
■日本学術会議だより	24
■会員異動	26
■賛助会員	32
■賛助会員入会, 広告掲載のお願い	33

## NO. 78

August 1994

### 日本発生生物学会

〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門

会 長：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38  
基礎生物学研究所 発生生物学研究系 形態形成研究部門  
江口吾朗（電話 0564-55-7570）

DGD編集主幹：〒 227 横浜市緑区長津田町4259  
東京工業大学生命理工学部  
星 元紀（電話 045-924-5720）

DGD編集幹事：〒 724 東広島市鏡山1-3-1  
広島大学理学部遺伝子科学  
嶋田 拓（電話 0824-24-7446）

事務局：〒 444 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38  
基礎生物学研究所 発生生物学研究系 生殖研究部門内  
（幹事長）長濱嘉孝（電話 0564-55-7550）  
（庶務幹事）田中 実（電話 0564-55-7552）  
（会計幹事）吉国通庸（電話 0564-55-7551）

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込5-16-9  
学会センター C21  
財団法人 学会事務センター  
日本発生生物学会担当係（電話 03-5814-5810）

日本発生生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（DGD、インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面でお問い合わせ下さい。

## 会長からのお願い

会長2期目も間もなく終わろうとしています。月日の経つのは早いもの、と申しますが、安増郁夫前会長から会長の職を引き継ぎまして、学会の発展を促すようなことを何一つできませんので、焦りからか、一層それが強く感じられるのです。

本学会も会員数が漸く1,000名を超え、年一度開催されております大会からも、この学会の活気は今なお持続しているように感じます。これは、年毎に大会委員長として大会をお引き受けいただいている先生方をはじめ、会員の皆さんのご努力の賜物と感謝いたします。

さて、私が会長に選任されて先づ取り組みましたことは、学会のactivityの象徴でもあるDGDの質的向上でありました。学会がこのような国際学術誌を機関誌として刊行し、その内容の質的向上を図ることは容易ではありません。質的向上を図ることのみに専念すれば会員の権利を害することも起こり得ますし、一方、会員の権利を重視し過ぎますと、質の向上が容易に遂げられないといったことになるからです。それで、会員皆さんのご意見をいただくことから始め、230名を超える皆さんから積極的なご意見を頂戴することができました。ご意見の大勢は、学会のDGD刊行の目的及びpolicyを商業的理由でゆがめないという条件つきで、DGDの刊行を適当な出版社にゆだねてはどうか、そうすることで、DGD出版にかかわる事務も簡素化でき経済的にも楽になるのではないか、というものでありました。このような会員の意を踏まえ、運営委員会のたび毎に論議を重ね、DGDの刊行を1995年1月1日からBlackwell Scientific Publications社オーストラリア支社にゆだねることといたしました。この運営委員会の議は、先の第27回の大会（仙台）の総会にてご承認いただきました。

編集主幹は既に片桐千明先生から星元紀先生に引き継いでいただいておりますが、BSP社による刊行が成功するか否かは一に原稿の投稿数にかかっております。編集委員会によって原稿が受理されて以後、著者と出版者が直接交渉いただくことができ、出版の専門家（印刷業者ではなくて）がその任に当たってくれますので、著者にとっては従来では得られなかったメリットも生まれて参ります。DGDを少しでも良い学術誌に育て上げることが出来ますよう、会員の皆さんがこぞって自信のある力作をどしどしご投稿下さることを切に願って止みません。

1994年8月

会長 江口吾朗

## 日本発生生物学会第14期会長および運営委員選挙結果

1994年8月4日および9月5日に名古屋大学理学部にて開票を行い、以下のように決まりました。

第二次会長選挙の結果（敬称略）

会長：岡田 益吉

（次点：竹市 雅俊）

運営委員選挙の結果（50音順：敬称略）

運営委員：安部 眞一	佐藤 矩行	東中川 徹
井出 宏之	嶋田 拓	藤澤 肇
江口 吾朗	白井 浩子	星 元紀
黒岩 厚	竹市 雅俊	八杉 貞雄
近藤 寿人	団 まりな	（次点：吉里 勝利）

以上

選挙管理委員長：藤澤 肇

選挙管理委員：黒岩 厚

同：長濱 嘉孝

### DGD編集業務の一部変更について

DGD編集主幹 星 元紀

すでに昨年度の総会などで、江口会長よりご報告がありましたように、本学会発行の*Development Growth & Differentiation*の製作ならびに販売元が、37巻1号（1995年2月刊行予定）よりBlackwell Scientific Publications PTY Limitedになります。これに伴い、投稿から出版までのプロセスの一部が変更になります。投稿先は従来通り編集主幹ですが、これまで編集幹事が行っていた業務は、ほぼ全面的にBlackwell社が行うことになります。詳細は12月発行予定の次号サーキュラーでお知らせ致しますので、ご参照願います。

この変更により、*Development Growth & Differentiation*の投稿数、サーキュレーション、売上部数などが増すことが期待されております。しかし同時に、一定数の採択原稿を遅滞なく同社に渡す義務が生じます。従来にもまして、会員諸氏からの積極的なご投稿をお願いします。次第であります。

## 第52回（平成6年度第二回）運営委員会

第52回運営委員会は、1994年5月24日午後5時より、仙台・法華クラブに於いて開催された。

出席者（敬称略）：江口吾朗（会長）、長濱嘉孝（兼幹事長）、星元紀（兼編集主幹）、浅島誠、安部眞一、井出宏之、岡田益吉、佐藤矩行、中辻憲夫、藤澤肇、八杉貞雄、安増郁夫（以上運営委員）、嶋田拓（編集幹事）、田中実（庶務幹事）、吉国通庸（会計幹事）

### 1. 会長挨拶

### 2. 報告事項

#### 1) 会員数の推移

1994年4月30日現在の会員数は1075名で、内訳は、正会員860名、学生会員203名、賛助会員12名。本年1月との比較で57名の増加。

#### 2) Circular 77号は4月に会員に配布済み。78号は9月半ばに発刊予定。

#### 3) 新技術事業団・吉里プロジェクト主催の国際シンポジウムへの後援を承認した。

#### 4) DGD編集

星編集主幹からDGD編集委員会（DGDの刊行）、DGDの編集状況についての説明がなされた。本年、これまで30篇の投稿（このうち6篇は外国から）があったが、その数は減少傾向にあり、学会員による投稿を是非お願いしたいとの要望が出された。

#### 5) 日本学術会議

安増郁夫・動物研連委員より、1994年3月22日に開催された上記委員会（次期学術会議会員選挙）についての報告がなされた。

#### 6) 1994年度大会

井出宏之氏（大会委員長）より、第27回大会の参加者数、演題数などについての報告がなされた。演題数は217の多くに達し、またそのうち2/3は口頭発表希望であったため、3日間、3会場で開催となった旨の説明があった。

### 3. 審議事項

#### 1) 吉国通庸会計幹事より、岩松鷹司、鬼式一夫両会計監査委員より監査を受けた1993年度会計決算案の説明がなされ、審議の結果承認された（Circular 77号参照）。

#### 2) 吉国通庸会計幹事より、1995年度会計予算案の説明があり、審議の結果原案通り承認された（Circular 77号参照）。

#### 3) 前回の運営委員会からの継続審議となっていた、本学会誌DGDの刊行を1995年よりBlackwell社に委ねる件につき（Circular 77号参照）、江口会長、長濱幹事長、星編集主幹などから出版者との交渉状況などについての説明があり、種々審議した後、Blackwell社に委ねることを決定し、総会で承認を得ることとした。

#### 4) 科学研究費補助金審査委員候補者（一段審査3名、二段審査2名）を選出した。

5) 1995年度大会

第28回大会は、藤澤肇氏（名古屋大学・理学部・分子生物）を委員長として名古屋で開催することが確認され、開催具体案について藤澤委員長を中心に早急に検討することとなった。

6) 1996年度大会

第29回大会は、佐藤矩行氏（京都大学・理学部・動物）を委員長として、京都で開催されることが決定された。

## 第27回 総 会

第27回総会は、1994年5月26日仙台市民会館B会場において開催された。議長に鬼武一夫氏を選出した後、以下の次第で議事が進行された。

1. 井出宏之 第27回大会委員長挨拶

2. 江口吾朗学会長挨拶

3. 報告及び審議事項

1) 庶務報告（田中実庶務幹事、運営委員会報告に同じ）

2) 会計報告

吉国通庸会計幹事より、1993年度収支決算案について説明があった後、鬼武一夫会計監査委員より会計監査について報告があり、原案通り承認された。しかし、鬼武委員より、学会財政はきわめて厳しい状態にあるので何らかの方策を講じて早急に改善する必要があるとの発言があった。

3) 同会計幹事より、1994年度予算案の説明があり、原案通り承認された。

4) DGD編集委員会報告（星元紀DGD編集主幹、運営委員会報告に同じ）

5) DGDの刊行について

この件に関して、江口会長からこれまでの経緯（全学会員へのアンケートの実施、総会や運営委員会での審議）について説明があった後、原案（1995年1月よりDGDの刊行をBlackwell社に委ねる）通り承認された。

6) 長濱幹事長から、科学研究費補助金審査委員候補者（第一段3名、第二段2名）を選出した旨、報告された。

7) 次期会長選挙について

事務局から、これまで次期会長選挙は秋に行われてきたが、今回はDGDの出版社変更など重要課題があるので、会長の交代に伴う学会諸事務のスムーズな移行のため、次期会長選挙をいつもより早めて行うことが提案され、原案通り承認された。

8) 藤澤肇 第28回大会委員長より開催の挨拶があった。

9) 第29回大会が、佐藤矩行氏を大会委員長として京都で開催されることが承認された。

## 日本発生生物学会 第27回大会後記

東北大・理・生物 井出宏之

運営委員会で仙台開催をお引き受けしたのが昨年(1997)の1月、早速、会場を探し、仙台市民会館という中規模の口演会場が2つとれる手ごろなのを見つけました。しかもここは小会議室を多数とれることが分かり、夜はワークショップを行うというこの学会では久しぶりの試みが可能になりました。また江口会長から一般市民向けの公開講演会の開催を勧められ、これはこの学会としては多分初めて行うことになりました。勿論「学会の顔」としてのシンポジウム、加藤賞受賞講演も例年通り行うので、これだけでかなり盛りだくさんの企画になりました。そのうえ、講演申込数が今までで最高の217となり、今までもぎりぎりの時間でやっていたので、ついに時間が足りなくなりました。といってもこれが分かった今年3月ではもう会期は伸ばせず、しかたなく3会場とし、予定外の小さな会場を作らねばならなくなりました。この小さな会場は常時混雑の状態になってしまい、たいへん申し訳なく思っております。来年以降、講演申込数の増大が見込まれ、しかも多くの方がポスター発表でなく、口演発表を希望される現状では、日程、口演会場数の変更などが必要と思います。但し、どのように行うかは全て準備委員会に任されており、これは実にやり易いシステムでした。

ワークショップは全部で9個行われました。いずれもたいへん意欲的なもので、夜にも関わらず会場も満員、急きょ広い会場に移したのもあるほどで、発生生物学会の基礎となる層の健在の感を深くしました。また東大の松田先生等によって企画された岡崎嘉代先生の記念シンポジウムは多くの方のご努力でテレビ会議になり、東京のご自宅から団先生のお話をうかがえ、またこのためにアメリカから来られた Holtzer 教授とのやりとりを聞けるという楽しい企画になりました。関係された先生方にお礼申し上げます。

シンポジウム「形態形成—発生現象を分子で語る」は恒例通り、最終日の午後に行われました。オーガナイザーの藤沢先生が最初に説明されたように、このタイトルは決して新しいものではありませんが内容は常に新しくなっており、今回増えた若い会員のためには特に有意義なものであったと思います。

その翌日午後に市民向け講座「動物の再生」が行われました。Stocum教授と江口会長によって再生の基礎的問題とそのヒトへの応用という時宜を得た講演をしていただきました。後で一般市民の方からこの種の講演を待っていたという手紙を何通かいただき、この種の企画の必要性を痛感しました。講演された両先生と、Stocum教授を招待し英語の講演を実に手際よく解説して下さった吉里先生に心からお礼申し上げます。

本大会の参加者は若い人がまた一段と増え、運営も多くの若い力によってなされました。一方、偶然一時帰国しておられた Holtfreter 夫人が大会にこられ(夫人は東北大・生物教室のご出身ですが)、いくつかの感動的な出会いを目にすることができました。伝統と発展の中の4日間でした。

## 日本発生物学会 第27回大会決算報告

### 大会運営関係経費

#### 1. 収入の部

大会参加費	3,018,000 円
内訳 一般 (6,000円×328名)	1,968,000 円
学生 (5,000円×210名)	1,050,000 円
(非会員のシンポジウム, ワークショップ招待者, 会場運営の学生会員を除く)	
学会本部からの補助金	250,000 円
講演要旨集発送費 (学会本部より)	412,300 円
講演要旨集印刷費補助 (学会本部より)	800,000 円
テレビシンポジウム回線開設料 (東京側)	28,975 円
講演要旨集売り上げ	22,500 円
広告代	465,000 円
賛助金	750,000 円
収入合計	5,746,775 円

#### 2. 支出の部

講演要旨集及び名札印刷費	993,100 円
講演要旨集及び名札発送費	412,300 円
会場使用料	674,192 円
会場運営経費	604,032 円
人件費	1,070,000 円
弁当経費	186,062 円
文具, 通信, 準備委員会経費	358,760 円
休憩室茶菓子経費	77,833 円
公開講演会経費	177,232 円
テレビシンポジウム回線設置, 使用料 (東京側を含む)	104,296 円
懇親会補助	487,659 円
支出合計	5,145,466 円

#### 3. 残金 (DGD基金へ全額寄付)

601,309 円

### 懇親会経費

#### 1. 収入の部

懇親会参加費 (5,000円×310名)	1,550,000 円
広告代, 賛助金からの補助	487,659 円
収入合計	2,037,659 円

#### 2. 支出の部

懇親会経費	2,037,659 円
-------	-------------

#### 3. 残金

0 円

## Healthyな学会

東大・教養・生物 松田良一

今年の日本発生物学会大会は、口演数の増加がある閾値を越えたためか、3会場形式で行なわれた。そのため口演発表の情報量は確かに増えたが、私の印象としては、この学会特有の「風通しの良さ」が少なくなってしまった気がした。しかも座長によっては、熱心さのあまり、時間を大巾に超過した発表や討論を容認してしまい、会場ごとの進行がバラバラになり、まともに聞いた発表数はかえって少なくなってしまった(特に1・2日目)。又、ポスターや口演の会場がともに広さが極端に異なり、部屋によっては寿司詰め状態になることもあった。特に3日目のA会場は人が入りきれず(実行委の機転で会場外でもテレビ画像を見られるようにはしてくれたが)、演者・聞き手ともに少々心残りであったろう。私としては(こちら勝手なことを言う筋合いではないことは重々承知だが)、もっとポスター発表を重視し、口演は時間厳守で大部屋2会場形式のままとした方が良いと思う。しかし、これらの試行錯誤は、学会として成長中の証であり、むしろ喜ぶべきことである。ポスターを導入せず、やたら口演会場を多くし、それらのいくつかは時として演者と同じ研究室の人々だけといった、どこかの学会よりはるかにhealthyであることは言うまでもない。又、4日目に行なわれた公開講演会で江口吾朗会長自らが一般市民にお話しをされたことは、学問の社会へのfeedbackとして、さらに次世代層への理科振興策の1つとして重要な試みであった。今後も是非続けて欲しいものだ。

発表内容面では、阿形清和会員らが報告したプラナリア細胞の培養に関する研究が出色であった。彼らはembryo extractならぬプラナリア抽出液中に強いプロテアーゼ活性を見出し、それを阻害剤で抑えて培養液に加えることにより、基質及び細胞接着性をもったプラナリア細胞の培養に初めて成功した。この条件で細胞の増殖と分化がおこれば、全て又は特定の細胞(neoblast?)における全能性が検証できることになり大変興味もたれる。今後の発展に期待したい。Dr. T. H. Morganも90年以上経た日本でプラナリアの再生生物学がまともに再生していることを知れば満足であろう。Dr. H. Holtzerもプラナリアの再生機構の研究をdirectにsupportできる日本の発生物学はとてもhealthyであると言っておられた。

2日目に行なわれた岡崎嘉代記念シンポジウムでは大会実行委員長長の井出宏之先生はじめ多くの方々大変お世話になりました。お話しをしてくださった団勝磨先生、Dr. H. Holtzer, そして岡田節人先生に深く感謝いたします。特に米国から自費で駆けつけてくれたDr. H. Holtzerと奥様(岡崎先生の共同研究者)には彼らのKayo先生に対する並々なぬ思いが感じられた。彼らの旅費の一部にとご寄付が多くの方々の方々から寄せられたことにはDr. Holtzerも痛く感激されていた。世話人の1人として、3人の演者が熱く語ってくれた岡崎嘉代先生の学問と人柄への思入れ、そしてこの様な企画を様々な面でsupportして下さった日本発生物学会及びその会員諸氏の心に感動した。彼女には「あなた、そんなことをするエネルギーがあったら、もっと研究に使ったら

どう？」と言われそうではあるが、科学を単なる自然に関する情報の集積としてのみ捉えず、多くの人間の個性と努力の産物としてrespectする心、そしてそれをも包含しうる学会大会の存在に、私は healthy さを感じる。会場での録音テープの中から3名の演者のお話の一部を再録し、ここで筆をおきます。東北地区の皆様、有難うございました。

岡先生「『碁<sup>碁</sup>仇は、にくさは憎し、なつかしし』という言葉があります。私と岡崎君の間には研究においては柔道や剣道における場合と同じ様な緊張感がありました。でも、これは決してケンカではない。一生けん命なんだから。」

Dr. Holtzer 「What really to me is, basic problems in developmental biology, mainly, how a mother cell divides, very often, daughters have same differentiation program of their mother. On the other hand, it is very clear during development, some of those cells must divide and produce daughters that have very different differentiation program from their mother. Kayo's system is unusually qualified to answer this question.」  
「I would like to remind you that works Dr. Okazaki first described, I will predict, is going to be terribly important as well as *C. elegans* and *Drosophila* to understand genetic basis of cytodifferentiation and morphogenesis.」

岡田先生「日本の学問にはかつて村というものが存在していました。分野によっては現在も存在しています。私と岡崎嘉代さんは全く違う村の住人でしたが、彼女とは大変親しくさせていただきました。」「Cytoembryology(彼らが時としてcynicalに2-cell embryologyと呼んでいますが)をspicule formationまで発展させたのは彼女の業績です。」「私がここに呼ばれたということは日本発生物学会では今現在、村というものは全く存在していない証です。」

## 日本発生生物学会 第27回大会に参加して

三菱化成生命科学研究所 橋本有弘  
細胞情報制御グループ

本年度の日本発生生物学会は仙台市民会館で5月25日から27日にかけておこなわれた。発生生物学会の会員数はついに千人を越え、大会参加者はその半数とのことであった。予想をうわまわる演題数の増加にともない、会場数を従来の2会場から3会場に急遽変更するなど、井出先生をはじめ、大会関係者の方々には多大なご苦勞をおかけしたとのことである。参加者のひとりとして御礼申し上げたい。

今回、新しい試みとして公募によるワークショップが大会前日と第一日目および最終日の夜に開かれた。私も岸本健雄先生（東京工業大学）と「細胞増殖と細胞分化の接点を探る：発生分化における Key Factor としての CDC2 ファミリー・キナーゼ」と題するワークショップを企画させていただいた。日程の都合上、9つのワークショップのうち6つが25日の夜に平行して開かれることとなり、正直なところ、はたして何人の方が我々の企画に関心を持ってくださるだろうか、というのが私の最大の関心事、というよりは心配事であった。幸いにして、予想をうわまわる数の方々が参加して下さり、一安心した。翌日、聞いたところでは、おおむねどのワークショップも盛況であったとのこと、「みんながワークショップを企画してしまったために、聴き手がいなくなるのではないか」などという私の心配は、杞憂に過ぎなかった。時間帯が午後6時から9時であるにもかかわらず、熱心に討論に参加された会員の皆様に御礼を申し上げたい。

さて、今回のワークショップの試み全般についてだが、初めての試みとして、まずは成功と言ってよいと思う。個人的には、是非、来年度以降もワークショップを続けていくことを大会関係者の方々をお願いしたい。その際、以下のような点について考慮していただけるとたいへんありがたいと思う。(1)ワークショップの時間帯を拡大して昼にも行い、平行して行われるワークショップの数をせめて3~4にとどめる。他のワークショップを企画された方々とも、自分の企画がなければ互いのワークショップを聴きにいききたいところなのだが残念だ、という話をしていたのだが、後日、何人かの方々から、聴きたいワークショップが複数あって困ったという声も耳にした。必要な時間枠は一般講演に占めるポスター発表の比率を高くする（場合によっては一般講演はすべてポスターにする）ことで生み出せるのではないだろうか。ポスター発表に対する意識の変化——かつては口頭発表からポスターにまわされたという意識もあったように思うが、今日では発表する側も聴く側もポスターに慣れ、むしろポスターのほうがデータをたくさん話せるというような positive なとらえかたが浸透してきた——からこの案は案外抵抗なく受け入れられるのではないだろうか。(2)ワークショップの企画は今回のように公募とし、会員誰もが企画できるような形式にする。特定個人や研究グループに企画内容が偏らないようにするために、同じ研究分野、同じオーガナイザーによるワークショップは2年続けて行わないなどの工夫をしてはどうだろうか。(3)私がワークショップに期待するものは、ある程度絞り込まれたテーマについて、その分野

の研究者が何人か集まって話題を提供し、自由に議論を展開する機会を提供するというのである。時間の制約上、一般講演では単発に終わりがちな議論にも展開が期待できるし、review 的な内容をも含むことにより、専門外の研究者も議論に参加しやすくなるだろう。シンポジウムをかなりまとまった仕事を発表する場（必然的に教授クラスの方々が講演されることが多くなる）とするならば、ワークショップを現在進行形の仕事を方向付けていくための、若手研究者が活躍できる場として位置づけていけないだろうか。

さて、今回、もうひとつ私にとって印象深かったことは、これまで他の学会をおもな発表の場として、優れた成果を発表されてきた方々が、この2～3年、発生物学会にも参加されるようになられたことである。これはとりもおさず、発生物現象が生命科学研究に携わる者にとって、如何に魅力的なものであるかということの証左であるが、同時に発生物学会の非閉鎖性を示すものと思いたい。また、これは研究の交流という点から、私達発生物学会員にとって、たいへん心強いことでもある。

個々の発表に対する感想などは好みの問題の方が大きいように思うので、今回、はじめて試みられたワークショップに絞って思うところを述べさせていただいた。たまたま、発生物学会の直前、コールドスプリングハーバーでのシンポジウムに参加する機会があったのだが、そこでは朝9時から夜11時まで講演が続く。時差ボケの頭で感じたことのひとつは、このバイタリティー、あるいは研究に対する貧欲さは、研究能力のひとつではないか、ということであった。発生物学会の3日間の会期中1日くらい、深夜は無理としても night session くらいみんなでがんばってみるのも楽しいのではないかと、思うのですがいかがでしょうか。

## 日本発生物学会第28回大会のお知らせ

日時：平成7年5月29日(月)―31日(水)

会場：愛知県産業貿易館

〒460 名古屋市中区丸の内3-1-6

Tel：052-231-6351

大会準備委員長：藤 澤 肇

名古屋大学理学部分子生物

Tel：052-789-2978

Fax：052-789-2979

## 岡崎嘉代さんの告別式での弔辞

(1994年2月27日)

米田満樹

岡崎さん、となれなれしく声をかけさせていただきます。大正生れで同世代の男の研究者達から、のちに「カヨばあさん」と親しげに呼ばれるようになる岡崎さんも、今から40年前の駆け出しの私にとっては、初めて出逢う女の研究者、正確には初めての「日本生れの女性研究者」でした。東京都立大学の同じ研究室で机を並べたとき、岡崎さんは34才で、数篇の論文と数回の学会講演があり、特に、ゆっくりとした声で話す歯切れのよさはすでに抜群でした。きっと団勝磨先生の過激な指導の賜物だったのでしょうか。しかし団先生自身の講演が、よく云われるような、「恐縮しつつホラを吹く」大衆講談の調子であるのを岡崎さんは好んでいず、彼女自身の講演は研究結果の本質的な要点だけを過不足なく、慎重に撰んだ言葉で聴衆に正しく伝えることに徹し切る、静かな迫力をもって、と私は当時を憶い出します。岡崎さんのスタイルをマネしたい、と私は思いました。

とはいえ、結果が思うままにならぬ失意の中で、おのれに見合う研究テーマを見つけようとする30代の研究者の常として、岡崎さんもやはり、いつもナーヴァスでした。研究者なら必ず通過すべきこのきびしい時期の、ナマぐさい生きざまの手本を、男ではなく女の研究者の中に見たことが、私の人生観のかなりの部分に影響しました。

37才の岡崎さんが京都大学の瀬戸臨海実験所でひと夏を過したことが、きっと岡崎さんの仕事にエポックを作った事件だと、今思います。コシダカウニという、透明で中のよく見える貴重な材料をぜいたくに使い、それによって岡崎さんは、ウニの幼生がもっている炭酸カルシウムの骨片が出現して成長する場所が、間充織細胞の細胞質の中である、ということに確信を持たれたに違いないと思います。こうして、ウニ幼生の骨片がどこでできるのか、という古くからの論争に力づくで結着をつけました。「力づく」と私が云う証拠は、当時習慣的に東大三崎臨海実験所で仕事していた岡崎さんが、そのころ六研と呼ばれた部屋で、位相差顕微鏡をひたすら覗き続けたその姿が、小舟で海に遊びに出た私達にも窓越しにしばしば見えたからです。「一日に20時間覗いていた」という伝説は誇張ですが、平均17時間というところが私のコンサヴァティブな見積りです。

D. G. D. の前身である Embryologia の、当時は編集主幹だった佐藤忠雄先生が、このような観察に徹した仕事こそ Embryologia にふさわしいと云われたとのこと。岡崎さんのこの仕事、刷り上りで38ページという、当時でも異例の長篇は、1960年の12月にまるごとそのまま掲載されることになりました。

40才を過ぎて初めて訪れた外国出張での仕事、それとウニ幼生の骨片形成を本質的には無機的な結晶形成だとした后年の仕事にまではふれるゆとりがありません。重要なのは40才後半の岡崎さんが、単離小割球の骨片形成をインヴィトロで再現した仕事です。今様に云えば形質発現の機構を解明する基本的実験系を創出したとでも呼ばれる先駆的なもので、これによって Okazaki の名前は不滅のものとなりました。

東京都立大学を63才で定年退職されてから岡崎さんは学会に殆ど顔を出されず、多分、以前から歩行が不自由だった、そのせいだと思っております。昔の仕事仲間と逢われることも少く、私個人について云えば数ヵ月に1回位、日曜日の午后に長距離電話する程度でした。大ていは私の側からもちこむ人生相談でした。現職時代の岡崎さんには気嫌のよい時と悪いときがあって、私にとっては緊張を感じる会話の相手でしたが最近ではそのようなこともなく、でも岡崎さんのアドバイスは昔と変わらずにいつも断定的で、また興にのれば、だれそれの噂と悪口を賑やかにいいかわし、そんなときの岡崎さんの辛辣な口調の鋭どきは一向に衰えていず、突然の訃報に私はまだとまどっています。岡崎さんは研究者として、人生上の私の先達でした。東京都立大学での永くきびしかった勤めから解放されたあとの自由な日々が、11年足らずで幕を閉じてしまうことが、岡崎さんにはさぞ無念だったことと思ひ、私は深い悲しみでいっぱいです。ご冥福をお祈りします。

## 第44回 科学講演会開催計画

- 主催** : 財団法人 東レ科学振興会  
千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)  
Tel 0473-50-6104 Fax 0473-50-6082
- とき** : 平成6年10月4日(火)  
開場: 17時30分  
開演: 18時00分 終演: 20時45分
- ところ** : 有楽町朝日ホール  
東京都千代田区有楽町2-5-1  
有楽町マリオン11階(JR有楽町駅前)
- テーマ** : “電波と光で宇宙をみる”  
I. 宇宙にひろがる分子の世界  
分子科学研究所教授 齋藤修二  
II. 観測でひろがる宇宙像  
国立天文台教授 海部宣男
- その他** : ★入場無料, 定員638名(予約なし・先着順)  
★ご来聴の方には, 後日講演記録を進呈致します。

以上

# 「第10回形態科学シンポジウム」予告

日時：平成6年11月19日（土）  
13：00－17：00

会場：東京大学山上会館（本郷キャンパス内）

主題：生物科学の躍進と形態科学の新しい展開

目的：遺伝子化学を軸とする生物科学の方法論を学び、形態学に新しい生命を吹き込もうとしている若い研究者たちの心意気を紹介する。

第I部 13:00-15:00 座長 外崎 昭

1. 岡村康司（東京大学医学部脳研・神経生物）  
ホヤ胚初期発生と膜興奮性発達の分子機構
2. 岡本 仁（廣応義塾大学医学部生理）  
ゼブラフィッシュを使った脊椎動物神経細胞分化機構の解析
3. 岡野栄之（東京大学医科学研・化学）  
ショウジョウバエ神経系の発生・分化を制御する遺伝子群の同定と哺乳類神経系への応用
4. 後藤 薫（東北大学医学部解剖）  
リン脂質性セカンドメッセンジャー代謝酵素ジアシルグリセロールキナーゼの分子多様性と発現局在

第II部 15:00-17:00 座長 広川信隆

5. 重本隆一（京都大学医学部高次脳形態）  
グルタメート受容体の局在と機能
6. 島田昌一（大阪大学医学部解剖）  
脳に発現するトランスポーターの遺伝組織化学
7. 佐藤玲子（東京大学医学部解剖）  
キネシンの分子構造と遺伝子分析
8. 倉岡晃夫（九州大学医学部解剖）  
ギャップ結合の分子構造

閉会の言葉 解剖学研究連絡委員長（第16期会員）

「講師を囲む懇談会」について：シンポジウム終了後、山上会館内レストランにて、講師と出席者の懇談の場を持ちたいと存じます。会費5,000円程度（各自負担、講師はご招待）を予定しています。以上

<事務局：外崎 昭、山形大学医学部解剖学第1講座、

〒990-23 山形市飯田西2-2-2、Tel.0236-33-1110、Fax.0236-25-8969>

主催 日本学術会議解剖学研究連絡委員会

お知らせ

## 国際シンポジウム「傷の治癒と組織再生」

International Symposium on Wound Healing and Tissue Regeneration

日時：1995年（平成7年）2月23日（木）－24日（金）

会場：サンスクエア東広島・アザレアホール（Phone 0824-24-3811）

（広島県 東広島市内・JR山陽本線西条駅下車南へ徒歩7分）

### ◆趣旨

傷の治癒および組織再生を要として医学と生物学が国際的に交流する機会をつくる

### ◆招待講演者

**傷の治癒** Barrandon, Y.(Ecole Normale Supérieure, Paris), Cohen, K.(Medical College of Virginia, USA), Ehrlich, P.(Pennsylvania State University, USA), Fausto, N.(Brown University, USA), Lapiere, C.(Université de Liège, Belgium) and others

**再生** Brockes, J. P.(University College London, England), Bryant, S. V.(University of California, USA), Stocum, D.(Indiana-Purdue University, USA), Simon, H.\* (Bristol-Myers Squibb Institute, Princeton, USA), Tassava, R.(Ohio State University, Columbus, USA) and others

### ◆発表・出版

シンポジウムの内容の一部は "Wound Repair and Regeneration" (The Wound Healing Society および European Tissue Repair Society の公式出版物)に公表の予定です。

一般発表の場としてポスター発表を検討中です。ご希望の方は下記事務局までご連絡ください。

### ◆組織委員会

Cohen, K. (Virginia Commonwealth University, USA); Lapiere, C. (Université de Liège, Belgium); Stocum, D. (Indiana-Purdue University, USA); 江口 吾朗 (国立基礎生物学研究所), 塩谷 信幸 (北里大学・医・形成外科), 井出 宏之 (東北大学・理・生物), 吉里 勝利 (新技術事業団・吉里再生機構プロジェクト; 広島大学・理)

**主催**：新技術事業団・吉里再生機構プロジェクト、**共催**：広島県・東広島市・広島中央テクノポリス建設促進協議会・加茂広域行政組合、**後援**：日本形成外科学会・日本発生物学会・The Wound Healing Society\*・European Tissue Repair Society\*・広島県産業技術振興機構\*・株式会社テクノプラザ\*（\* 交渉中）

**参加費**：無料

**連絡先**：事務局 本多久夫

新技術事業団・吉里再生機構プロジェクト・技術参事

〒724東広島市西条町御園宇242-37 広島テクノプラザ内

電話 0824-20-0505

FAX 0824-23-1485

# 木原記念財団学術賞

## 第3回（平成6年度）受賞候補者推薦依頼学会

### 推薦等要項

#### 〔推薦の対象〕

1. 推薦の対象は、最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行なっている国内の研究者で、原則として50才以下の者とします。

ただし、推薦の研究課題で他の著名な賞を受けていないこととします。

#### 〔推薦の依頼先〕

2. 推薦は生命科学に関する学会及び木原記念財団の役員に依頼しています。

推薦依頼学会：別 添

#### 〔推薦の方法〕

3. 推薦者は学会の代表者及び木原記念財団の役員とし、1推薦者からの推薦は1件とします。

(2)推薦者は所定の推薦書（別添）に必要事項を記入し、当財団あてに1部送付願います。

(3)推薦の締切日は平成6年9月30日(金)とします。

#### 〔選考方法及び結果〕

4. 受賞者は、当財団の選考委員会で候補者を選考し、理事会にて決定します。

(2)選考結果は推薦者及び受賞決定者に通知します。

(3)選考結果は公表します。

#### 〔木原記念財団学術賞の内容〕

5. 本賞は毎年原則として1件に贈呈します。

(2)本賞は賞状、記念牌及び賞金200万円を贈呈します。

#### 〔推薦書提出先・連絡先〕

財団法人 木原記念 横浜生命科学振興財団

〒232 横浜市南区六ッ川 3-122-20

TEL (045) 721-0751 FAX (045) 743-2833



## 東レ科学技術賞候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの
  - (1) 学術上の業績が顕著なもの
  - (2) 学術上重要な発見をしたもの
  - (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
  - (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの
2. 科学技術賞……………1件につき、賞状、金メダルおよび賞金 500万円 (2件前後の予定)
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内 (平成5年度に推薦された候補者 (注b.)は外数とします) および1推薦委員から1件以内
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………平成6年10月7日 (金) 必着
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会において選考し、評議員会において受賞者を決定します。  
選考委員 (委員長) 猪瀬 博 有馬朗人 恒藤敏彦 岡村弘之  
野依良治 竹内郁夫 宗宮重行 宇井理生
8. 科学技術賞の贈呈……………平成7年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。したがって平成5年度に推薦された候補者については、平成6年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし平成5年度の推薦以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、平成5年度推薦書(コピー)に加筆して当会あてご送付願います。
- c. 受賞者は、原則として1件1人とします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- d. この科学技術賞は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

(推薦書提出先・連絡先)

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号 (東レビル)

TEL : (0473) 50-6103 FAX : (0473) 50-6082

## 東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象……………貴学協会に関する分野で国内の研究機関において基礎的な研究に従事し、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者
2. 研究助成金……………総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度とします。
3. 推薦者……………学協会の代表者および推薦委員
4. 候補者推薦件数……………1学協会から2件以内および1推薦委員から1件以内
5. 推薦手続……………所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日……………平成6年10月7日(金) 必着
7. 選考方法……………下記委員からなる選考委員会において、提出された書類により一次選考を行い、更に面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。  
なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成6年12月下旬に面接をさせていただきます。  
選考委員 (委員長) 猪瀬 博 有馬朗人 恒藤敏彦 岡村弘之  
野依良治 竹内郁夫 宗宮重行 宇井理生
8. 研究助成金の贈呈……………平成7年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. この研究助成金は、研究目的を達成するために有効に使用されるものであれば、どのように使われるものを申請されても結構です。ただし、助成金受領決定後、その用途を変更される場合は、事前に当会の承諾を得ていただきます。  
助成金は使用期間の制限がありません。
- c. 助成金の受領者は、研究終了時まで毎年「助成研究年次報告書」を、また研究終了時に、「助成研究終了報告書」を提出していただきます。
- d. この助成金は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

(推薦書提出先・連絡先)

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号(東レビル)  
TEL:(0473) 50-6103 FAX:(0473) 50-6082

# 公益信託・團生物科学国際基金

## 平成7年度助成先公募について

1. 助成の対象  
生物科学の研究にたずさわっている若手研究者を対象とし、申請時に37歳以下で、国籍は問わない。  
また、諸外国からの若手研究者の募集、招聘などを含む。
2. 研究助成金  
平成7年4月～平成8年3月出発のものを対象とする。  
総額約380万円
  - ①長期（3ヵ月以内）の国際共同研究のための旅費と滞在費（1名当り90万円以下）。
  - ②短期（1ヵ月以内）の国際共同研究のための旅費と滞在費（1名当り50万円以下）。
  - ③国際研究集会参加のための旅費と滞在費（1名当り50万円以下）。
3. 応募方法  
応募用紙ならびに募集要項の詳細は当公益信託事務局にハガキで請求のこと。  
(㊟長期, 短期, 国際研究集会, 招聘の区別を必ず明記のこと)。
4. 申込締切日  
平成6年10月31日（必着）。
5. 選考の方法  
当公益信託運営委員会において選考する。
6. 採否の通知  
平成6年12月に採否を通知する。
7. 事務局  
〒103 東京都中央区日本橋3-1-8  
日本信託銀行本店窓口相談第一課  
公益信託・團生物科学国際基金  
TEL (03) 3245-8140  
FAX (03) 3271-2843

## 1995年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」の受賞候補者 及び 研究助成候補者の推薦依頼について

「女性科学者に明るい未来をの会」(1980年創立)は、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年、賞(猿橋賞)を贈呈してまいりました。

1990年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成することにいたしました。

賞金と助成金は、1990年3月に本会を母体として新設された、公益信託「女性自然科学者研究支援基金」(受託者 東洋信託銀行株式会社)から支出されます。

つきましては、下記の要領により受賞候補者と研究助成候補者の推薦をお願いいたします。

### 記

#### 猿 橋 賞

- 1 本賞は自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者(ただし、下記の推薦締切日で50才未満)に贈呈します。
- 2 本賞は賞状とし、副賞として賞金(30万円)をそえます。
- 3 本賞の贈呈は1年1件(1名)です。
- 4 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、略歴、主な業績リスト、主な論文別刷10編程度を、本会事務所までお送り下さい。
- 5 締切は1994年11月30日(必着)。
- 6 第15回の賞贈呈式は、1995年5月、東京において行なう予定です。

なお、最近3年間の猿橋賞受賞者は次の通りです。

#### 猿橋賞受賞者

第12回(1992年)	国立核融合科学研究所助教授 「高温プラズマの原子過程の研究」	加藤 隆子博士
第13回(1993)	東京大学教養学部教授 「非対称な分子の右左やDNA塩基配列の識別のしくみの研究」	黒田 玲子博士
第14回(1994)	岡山大学理学部助教授 「ヒトデの排卵と卵成熟のしくみの研究」	白井 浩子博士

## 研究助成

- 1 海外のシンポジウム等に参加し、論文を発表する女性研究者に対し、研究助成をいたします。
- 2 助成金は1件10万円とし、年に数件とします。
- 3 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40才未満）の略歴、研究業績、国際会議名（主催団体、開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
- 4 締切は1994年11月末日と、1995年4月末日の2回。

なお、1992年度以降の研究助成金受給者は次の通りです。

氏名	学位	所属	出張先
池田裕子	工博	京都工芸繊維大学助手	中国
田村知子	修士	大阪市立工業研究所研究員	中国
井上美穂	理博	京都大学霊長類研究所講師	フランス
内海紀代美	修士	東京大学大学院理学研究科在学	アメリカ
木下圭	理学修士	日本医科大学助手	アメリカ
本間美和子	医博	東京医科歯科大学医学部助手	アメリカ
熊谷紫麻見	理博	日本学術振興会特別研究員	中国
山口知子	理博	東京都立工業高専助教授	デンマーク
青木圭子	理博	静岡大学工学部助手	ハンガリー
筑本知子	工博	東京大学工学部技術補佐員	フランス

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-3330-2455 (FAX 兼用)

## (財)ブレインサイエンス振興財団、第9回研究助成候補者・塚原仲晃記念賞受賞候補者及び第8回国際交流助成候補者の推薦を公募

ブレインサイエンス振興財団では、平成6年度の助成、褒賞事業として下記の事業を行う計画で、候補者の推薦を公募している。

### 1. 助成、褒賞事業

1. 研究助成：ブレインサイエンスの分野において国際的評価に値する研究の助成。  
研究分野は、脳神経に関する実験的研究のみならず理論、モデリング研究をも含む。  
助成件数 8件、1件 100万円

2. 塚原仲晃記念賞：生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者に賞牌及び賞金200万円を贈呈。(原則として1件)

3. 派遣助成：ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の共同研究のための研究者の海外派遣の助成。往復渡航運賃を40万円を限度として若干件助成。  
(助成総額 150万円)

4. 招聘助成：ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間(3ヶ月以内)の招聘の助成。往復渡航運賃または滞在費を40万円を限度として若干件助成。  
(助成総額 100万円)

2. 推薦方法：関連学会代表責任者または研究者の所属機関長及び当財団の理事、評議委員の推薦による。但し、所定の用紙に必要事項を記入すること。

3. 推薦締切日：1及び2については平成6年11月30日(水)  
3及び4については平成7年1月17日(火)

4. 選考：選考委員会での選考を経て、平成7年3月中に評議委員会、理事会で決定。

推薦要領及び推薦書式をご希望の方は、80円切手同封のうえ財団宛文書でお申込下さい。

(財)ブレインサイエンス振興財団  
〒104 東京都中央区八重洲2-6-20  
ホンダ八重洲ビル 内  
電話 (03) 3273-2565

山田科学振興財団  
**1995年度研究援助候補推薦要項**

**援助の趣旨及び内容**

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助を致します。实用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件当たり300~700万円、総額4,500万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考致します。
3. 援助金を給与に充てることは出来ませんが、他の用途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年間とします。

**推薦方法**

- イ. 推薦者：本財団が依頼した学(協)会の代表者
- ロ. 推薦件数：1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続：推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。
  1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要な事項を記入したもの 4部
  2. 添付書類(研学(95)—5/7ページ参照)

**記載上の注意**

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

**推薦締切期日**

本財団に推薦書が到着する締切期日は  
**1995年3月31日**です。

**選考方法**

選考委員会において選考の上、理事会が決定します。

**選考結果の通知**

1995年7月末迄に推薦者及び代表研究者等宛て文書にて通知します。

**援助金の贈呈**

選考結果の通知後適時銀行振込にて贈呈致します。

**推薦書送付先及び連絡先**

財団法人 山田科学振興財団  
(Yamada Science Foundation)  
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号  
電話 大阪(06)757局3311(代表)

**研究の成果及び会計の報告**

援助金の受領者には、後日当財団の連絡に基づき、研究経過、研究成果、会計について報告書の提出及び研究交歓会での発表をして頂きます。

**付 記**

- イ. 援助金の用途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団、Yamada Science Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類にあつてはその別刷1部、また著書の類にあつてはその1部をご寄贈願います。
- ハ. ご提出頂きました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

1994年度は本学会が推薦した仲村春和氏(東北大学加齢医学研究所)が研究援助(400万円)を受けることになりました。

仲村春和 「視覚中枢における位置特異性獲得の分子機構」

## 第15期最後の総会開催される

平成6年6月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、5月25日から27日まで開催された第118回総会の概要と同総会で採択された「新しい方式の国際研究所の設立について(勧告)」、「公的機関の保有する情報の学術的利用について(要望)」、「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言(声明)」についてお知らせします。

## 日本学術会議第118回総会報告

日本学術会議第118回総会(第15期・第6回)が、5月25日～27日の3日間にわたって開催されました。

総会の初日(25日)の午前は、会長からの前回総会以降の経過報告に続いて、各部、各委員会等の報告が行われました。次いで、今回総会に提案されている13案件について、それぞれ提案説明と質疑応答が行われました。午後からは、各分会が開催され、総会提案案件の審議及び各分会個別案件について審議が行われました。

総会2日目(26日)の午前は、前日提案された13案件のうち、9案件の審議・採択が順次行われました。

まず、「日本学術会議会則の一部を改正する規則」、「日本学術会議の運営の細則に関する内規の一部改正」、「日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規の一部改正」、「副会長世話担当研究連絡委員会の運営について(申合せ)の一部改正」及び「第16期における研究連絡委員会委員の在任期間等に関する規定の適用について(申合せ)」について一括して討論が行われ、採決の結果、いずれも可決されました。これらの会則、内規等の改正は、

## 1. 運営審議会の構成員等の見直し

常置委員会と運営審議会の連絡を緊密にし、運営審議会の議論をより充実させるため、常置委員会委員長が常時運営審議会に出席することとし、併せて、運営審議会の構成員の見直しを行うこと。

## 2. 第7常置委員会の設置及び第16期に向けての研連の見直し

国際対応委員会の改組について(申合せ)(平成

5年4月22日第116回総会決定)に沿って第7常置委員会を設置し、併せて、各部等での検討結果を踏まえ、第16期へ向けての研連の見直しを行うこと。

## 3. 研連委員の在任期間等関係

研連委員の在任期間に関する運営内規の解釈をより一層明確化するとともに、将来に向けての研連活動の継続的発展・活性化を図るため、研連委員の在任期間等についての関係規定を整備すること。を趣旨とするものです。

次に、「運営審議会附置会員推薦手続検討委員会の設置」についての討論・採決が行われ、可決されました。これは、会員推薦制度導入以来、今回で4度目となり、会員推薦手続の過程において、幾つかの問題点がみられたことから、これらの諸問題について審議するため、新たな委員会を運営審議会に附置するものです。

続いて、「新しい方式の国際研究所の設立について(勧告)」、「公的機関の保有する情報の学術的利用について(要望)」、「女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言(声明)」についての討論・採決が行われ、可決されました。午後は、「第6常置委員会報告～国際学術交流・協力の飛躍的発展のために～」、「人口・食糧・土地利用特別委員会報告～21世紀の人口・食糧問題に対する全人類の取組に向けて～」、「学術国際貢献特別委員会報告～学術国際貢献のための新たなシステムについて～」及び「死と医療特別委員会報告～尊厳死について～」の4件の対外報告について討論が行われ、それぞれ承認されました。

総会3日目(27日)は、午前は各常置委員会及び国際対応委員会が、午後は各特別委員会がそれぞれ開催されました。

## 新しい方式の国際研究所の設立について (勧告) (抄)

近年、学術の国際交流がますます盛んになるとともに、新しい方式の研究所が世界の国々に設立されている。それらの新しさは、固有の研究員をほとんどもたず、国内外から招請した客員研究員による共同研究を企画し実行する点にある。この方式にふさわしい分野としては、自然科学のみならず、人文科学、社会科学を含め様々な領域が考えられるが、理論構築を主眼とする研究領域においては、研究テーマを学際的、機動的に選択する上で特に有効である。これは、また国を異にする若手研究者が相集い、生活と研究ないし研修を共にする場としても大きな効果を生むであろう。実際、世界的には、この意味で成果をあげている新研究所も少なくない。

さらに、いま国際貢献が基礎科学においても強く求められているが、それは、学術研究の推進と相互に強め合うべきものであって、このためにも新しい方式は最適である。

こうした観点から、新しい方式の国際研究所の設立が必要であり有用であるとの結論に達したので、ここにその設立を勧告する。

## 公的機関の保有する情報の学術的 利用について (要望) (抄)

研究者が学術研究のために必要とする情報には、極めて広範囲なものが含まれており、その内容は、学問分野によっても多種多様である。学問分野によっては、公的機関の保有する情報が学術研究にとって極めて重要なしは不可欠な意味をもつことになる場合も少なくないが、多くの場合に、かかる公的機関の保有する情報を学術情報として利用することには困難が伴っている。それは、公的機関の保有する情報の少ない部分が公開されておらず、学術情報としての利用についてもその開示を求めることができないからである。

このような公的機関の保有する情報の学術的な利用のためにも、まず基本となるのは、国民の基本的な権利に基づく公的機関の保有する情報の公開制度である。この制度の確立によって、公的機関の保有する情報の学術情報としての利用も同時に保障されることになるからである。公的機関としては、国家機関及び地方公共団体機関を挙げることができるが、国家機関の保有

する情報についての公開制度が設けられていないことは、学術研究にとっても特に重大な障害となっている。国民の「知る権利」を中心とする基本的権利を保障するための国家機関の保有する情報の公開制度は、学術研究にとっても極めて重要な意味をもっているといえることができる。国民の基本的な権利を保障するために、また学術研究の推進のためにも、原則公開を基本とした確かな内容を持つ国の情報公開制度の確立が不可欠であると考えられるので、ここに情報公開法の制定を要望する。

なお、公的機関の保有する情報の学術的利用については、情報の保存及び研究者による非公開情報の利用についての検討が必要である。

## 女性科学研究者の環境改善の緊急性 についての提言 (声明) (抄)

女性の社会的地位の向上を目指す取組が、国際的にも国内的にも種々行われているが、日本学術会議においても第10期及び第12期に女性科学研究者の地位の向上に関する「要望」を決議した。今期、すなわち第15期の発足に当たり、日本学術会議は「女性研究者の地位の向上」に留意することを再確認し、今期の活動計画の一つにこの課題を取り上げ審議してきた。その結果、女性科学研究者の地位の向上の必要性は理念的には一般化したものの、科学者全体の対応の遅れもあって、その地位は実質的に余り改善されていないことが明らかになった。

このため、特に基礎科学分野における科学研究者不足の事態が目前に迫っている現在、我が国における科学の調和のある発展のために、第10期、第12期での男女平等の視点を前提としつつ、日本学術会議は、改めて女性科学研究者の環境改善の緊急性を指摘するとともに、関係方面に環境改善の促進を強く訴えるものである。

「日本学術会議だより」について御意見、お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(3403)6291

## 会 員 異 動

### 〈新入会員〉

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ, ②材料)
伊藤 道彦	北里大学理学部生物科学科	〒228 相模原市北里1-15-1	①性分化 ②ニジマス・ツメガエル・マウス
能瀬 聡直	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38	①神経発生 ②ショウジョウバエ
森 誠	静岡大学農学部	〒422 静岡市大谷836	①鳥類の卵黄膜形成機構 ②ウズラ・ラット
吉田 香	愛知学院大学歯学部第二口腔外科学教室	〒464 名古屋市千種区末盛通2-11	①口唇口蓋裂の発生原因及び発生機序 ②マウス
濃野 勉	川崎医科大学薬理学教室	〒701-01 倉敷市松島577	①四肢の発生 ②ニワトリ
山本 亘彦	大阪大学基礎工学部生物工学科	〒560 豊中市待兼山町1-3	①大脳皮質における神経結合形成
三枝 誠行	岡山大学 教養・生物	〒700 岡山市津島中2-1-1	①海産甲殻類孵化機構の生化学的および形態学的研究 ②河口のカニ類
星島 一幸	京都大学理学部生物物理学教室	〒606 京都市左京区北白川追分町	①キイロショウジョウバエの性決定過程における遺伝子発現の調節機構の研究 ② <i>Drosophila melanogaster</i>
友岡 康弘	東京理科大学基礎工学部生物工学科	〒278 野田市山崎2641	①哺乳動物中枢神経系発生
指吸 俊次	高知大学理学部生物科学科	〒780 高知市曙町2-5-1	①酸化還元酵素・分子発生学(形態形成と膜新成) ②動物一般・ホヤ
小林 貞夫	国民健康保険群岡診療所	〒969-45 福島県耶麻郡西会津町上野尻字西林崎3137-20	①食道, 胃粘膜接合部 ②ヒト・ニワトリ・その他多数

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ, ②材料)
大導寺俊平	科研製薬(株)中央研究所 安全性研究所	〒426 藤枝市源助301	①発生制御 ②ラット
兵頭 昌雄	東海大学開発工学部生 物工学科	〒410-03 沼津市西野317	①発生工学・発生を調節す る遺伝子の研究 ②メダカ ( <i>Oryzias latipes</i> )
岡田 清孝	岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所	〒444 岡崎市明大寺町字西郷 中38	①高等植物の器官発生 ②シロイヌナズナ (アラビ ドプシス)
檐原 正則	神戸学院大学薬学部	〒651-21 神戸市西区伊川谷 町有瀬	
前田 恵子	東京大学医科学研究所 化学研究所	〒108 港区白金4-6-1	①アフリカツメガエルの初 期胚発生におけるIP <sub>3</sub> R の役割
川上 泰彦	川崎医科大学衛生学	〒701-01 倉敷市松島577	①四肢のパターン形成の分 子機構 ②ニワトリ・マウス
大山 恭司	慶應義塾大学医学部解 剖学教室第三研究室	〒160 新宿区信濃町35	①神経発生生物学, 神経解 剖学
柴田 直樹	信州大学理学部生物学 教室発生学講座	〒390 松本市旭3-1-1	①魚類の発生・形態形成 ②魚類・メダカ
小林 悟	筑波大学生物科学系	〒305 つくば市天王台 1-1-1	①発生生物学・生殖細胞
佐塚 隆志	(財)かずさDNA研究所	〒292 木更津市矢那内野 1532-3	①分子生物学
高橋 美佳	基礎生物学研究所細胞 情報部門	〒444 岡崎市明大寺町字西郷 中38	①発生生物学 ②魚類・ゼブラフィッシュ
福居 健一	奈良県立医科大学第三 内科	〒634 橿原市四条町840	①消化器・肝臓
小野 裕剛	慶應義塾大学理学部生 物学教室	〒223 横浜市港北区日吉 4-1-1	①神経冠分化・色素細胞
波澤 麻美	(財)進化生物学研究所	〒158 世田谷区上用賀 2-4-28	①家鶏における無翼形質の 発生遺伝学的研究 ②致死を伴なわぬ突然変異 により得られた無翼鶏

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ, ②材料)
村上富士夫	大阪大学基礎工学科	〒560 豊中市待兼山町1-1	①神経系の発生と可塑性 ②ラット
(学)岩田 正一	東京大学医科学研究所 ウイルス感染研究部	〒108 港区白金台4-6-1	①Chicken embryoでの血液 凝固因子の発現 ②ニワトリ胎児
(学)亀山 俊樹	名古屋大学理学部生物 学教室神経生物学講座	〒464-01 名古屋市千種区不 老町	①神経回路網の形成機構の 解析 ②マウス
(学)後藤 義博	名古屋大学理学部分子 生物学科第五講座	〒464-01 名古屋市千種区不 老町	①ニワトリ胚におけるHox 遺伝子の機能解析 ②ニワトリ・ <i>Gallus gallus</i>
(学)吉信公美子	熊本大学大学院理学研 究科	〒860 熊本市黒髪2-39-1	①精子核凝縮の機構 ②アカハライモリ <i>Cynops pyrrhogaster</i>
(学)須賀 圭	東京大学医科学研究所 化学研究部	〒108 港区白金台4-6-1	①発生・分化 ② <i>Xenopus</i>
(学)竹林 公子	大阪大学医学部病理学 教室	〒565 吹田市山田丘2-2	①骨組織の形成・改変を制 御する遺伝子のクローニ ング ②マウス
(学)木庭 正宏	日本新薬(株)分子生物学 研究部	〒601 京都市南区西大路八条 下ル	①初期胚操作 ②マウス
(学)村手 源英	総合研究大学院大学 (遺伝研)	〒411 三島市谷田1111	①発生学・顕微解剖学
(学)畠山 公利	筑波大学生物科学系	〒305 つくば市天王台1-1-1	
(学)北村富一郎	筑波大学大学院生物科 学研究科	〒305 つくば市天王台1-1-1	①発生生物学
(学)狩早 敬二	上智大学生命科学研究 所	〒102 千代田区紀尾井町7-1	
(学)野村 和子	九州大学理学部生物学 科	〒812 福岡市東区箱崎6-10-1	
(学)佐々木えりか	農林水産省家畜衛生試 験場分子免疫研究室	〒305 つくば市観音台1-1-1	

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ, ②材料)
(学)白崎 竜一	大阪大学基礎工学部生 物工学科	〒560 豊中市待兼山町1-3	①神経回路網形成のメカニ ズム ②胎仔ラット・マウス

<住所・所属変更>

(氏名)	(所属)	(住所)
加藤 憲一	大阪教育大学生物学教室	〒582 柏原市旭ヶ丘4-698-1
櫻井 隆繁	福島県立医科大学附属生体情報伝達 研究所細胞科学研究部門	〒960 福島市光が丘1
中津 武	武田薬品(株)薬剤安全性研究所	〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85
江藤 一洋	東京医科歯科大学歯学部発生制御	〒113 文京区湯島1-5-45
伊藤 一男	大阪大学理学部生物学教室	〒560 豊中市待兼山町1-16
宮田 昇平	日本大学文理学部化学科	〒156 世田谷区桜上水3-25-40
橋本 有弘	三菱化成生命科学研究所細胞情報制 御グループ	〒194 町田市南大谷11
中西 康夫	大阪大学理学部生物学科	〒560 豊中市待兼山町1-16
門松 健治	名古屋大学医学部生化学第一講座	〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
松尾 勲	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施 設形態発生部門	〒860 熊本市本荘2-2-1
山崎由起子	東京都臨床医学総合研究所化学療法 部	〒113 文京区駒込3-18-22
村松 寿子	名古屋大学医学部生化学第一講座	〒466 名古屋市昭和区鶴舞町65
岩田 文男	釧路公立大学経済学部生物学研究室	〒085 釧路市芦野4-1-1
菅野 義信	上越教育大学障害児教育研究系	〒943 上越市山屋敷町1
鈴木 範男	北海道大学理学部生物科学教室	〒060 札幌市北区北10条西8丁目
若松 佑子	名古屋大学生物分子応答研究センタ ー純系動物開発分野	〒464-01 名古屋市千種区不老町
北嶋 隆	テルモ(株)医科学研究所	〒259-01 神奈川県足柄上郡中井町 井ノ口1500
林 眞一	京都大学医学部分子遺伝学	〒606-01 京都市左京区聖護院川原町53
木口 憲爾	信州大学繊維学部応用生物科学科蚕 機能生理学講座	〒386 上田市常田3-15-1

(氏名)	(所属)	(住所)
相沢 慎一	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設 設形態発生部門	〒860 熊本市本荘2-2-1
大房 健	広島大学理学部生物科学科	〒724 東広島市鏡山1-3-1
谷口 茂彦		
中平 健祐	岡崎国立共同研究機構生理学研究所	〒444 岡崎市明大寺町字西郷中38
安達 卓	名古屋大学理学部生物学科動物学第 二講座	〒464-01 名古屋市千種区不老町
岡本 仁	慶應義塾大学医学部生理学教室	〒160 新宿区信濃町35
高橋 淑子	北里大学理学部生物	〒228 相模原市北里1-15-1
前野 貢	新潟大学理学部生物学科	〒950-21 新潟市五十嵐2の町8050
荒木 正介	京都府立医科大学花園学舎生物学教 室	〒603 京都市北区大將軍西鷹司町13-2
山本 雅敏	京都工芸繊維大学繊維学部応用生物 学科	〒606 京都市左京区松が崎御所海道町
東海林博樹	徳島大学酵素科学研究センター酵素 細胞学部門	〒770 徳島市蔵本町3-18-15
相賀裕美子	萬有製薬(株)つくば研究所	〒300-33 つくば市大久保3 テクノパー ク大穂
古田 泰秀	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設 設形態発生部門	〒860 熊本市本荘2-2-1
黒尾 誠	東京大学医学部第三内科	〒113 文京区本郷7-3-1
(学)藤森 一浩	大阪大学基礎工学部生物工学科葛西 研究室	〒560 豊中市待兼山町1-3
(学)和田 直之	早稲田大学人間科学部人間基礎科学 科	〒359 所沢市三ヶ島2-579-15
(学)永井 健治	理化学研究所ライフサイエンス筑波 研究センター分子神経生物学研究室	〒305 つくば市高野台3-1-1
(学)久保田幸彦	大阪大学教養部生物学教室	〒560 豊中市待兼山町1-16
(学)坂井 恵	鹿児島大学理学部生物 坂井雅夫様気付	〒890 鹿児島市郡元1-21-35
(学)喜納 宏昭	金沢大学がん研究所ウイルス部	〒920 金沢市宝町13-1
(学)清水 健	北海道大学理学部生物科学科	〒060 札幌市北区北10条西8丁目

(氏名)	(所属)	(住所)
(学)仲嶋 一範	理化学研究所ライフサイエンス筑波 研究センター分子神経生物学研究室	〒305 つくば市高野台3-1-1
(学)梅園 良彦	姫路工業大学理学部	〒678-12 兵庫県赤穂郡上郡町金出地 1479-1

<退 会>

(学)桂 奏

(学)古市 涼子

(学)見学美根子

(学)近藤 勝美

(賛助)日製産業(株)科学機器1グループ

(賛助)ベクトン・ディッキソン・オーバーシーズ

(賛助)(株)培風館

(賛助)岩城硝子(株)理化装置事業部

(賛助)名古屋片山化学(株)営業部

(賛助)藤本理化

<逝 去>

(学)夏山 知

## 〔賛助会員〕

- |                         |       |                                     |
|-------------------------|-------|-------------------------------------|
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書(株) | 〒 210 | 川崎市幸区塚越2-260<br>TEL 044-533-0470    |
| 生命誌研究館                  | 〒 569 | 高槻市紫町1-1<br>TEL 0726-81-9750        |
| 三菱化成生命科学研究所             | 〒 194 | 町田市南大谷11<br>TEL 0427-24-6226        |
| 明治乳業(株)ヘルスサイエンス研究所      | 〒 250 | 小田原市成田540<br>TEL 0465-37-3661       |
| 試薬及び理化学機器販売の理科研(株)      | 〒 463 | 名古屋市守山区元郷2-107<br>TEL 052-798-6151  |
| 科学の技術に奉仕する理工学社          | 〒 113 | 文京区本駒込5-9-10<br>TEL 03-3928-5211    |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬(株)    | 〒 606 | 京都市左京区北白川西伊織町25<br>TEL 075-721-0491 |

(50音順)

## 賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 江口 吾朗

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,000名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願ひ申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

日本発生生物学会

TEL(0564)55-7550 FAX(0564)55-7556

-----切-----り-----取-----り-----線-----

### 日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

( \_\_\_\_\_ 口 \_\_\_\_\_ 円)

住 所	
会 社 名	印
担当者名	
電話番号	

## 広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約1,000人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,000部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

	広	告	料
DGD本誌	1	頁	年6回
	半	頁	"
インフォメーション	1	頁	年3回
サーキュラー	半	頁	"
			150,000円
			78,000円
			30,000円
			15,000円

申し込み先：日本発生生物学会事務局

〒444 岡崎市明大寺町西郷中38

基礎生物学研究所 生殖研究部門内

**日本発生生物学会**

TEL(0564)55-7550 FAX(0564)55-7556

----- 切 り 取 り 線 -----

### 広告申し込み書

年      月      日

日本発生生物学会 御中

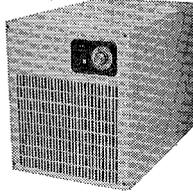
広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

<input type="checkbox"/>	DGD本誌	1	頁	
<input type="checkbox"/>	"	半	頁	
<input type="checkbox"/>	サーキュラー	1	頁	
<input type="checkbox"/>	"	半	頁	
住 所  会 社 名 <span style="float: right;">®</span>  担当者名 電話番号				

加熱冷却ユニット

クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

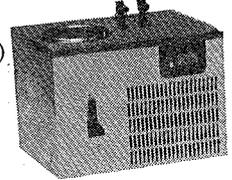
形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120ℓ	¥213,000
HC101A-3	100W	300W	160ℓ	¥225,000
HC131A-5	130W	500W	260ℓ	¥239,000
HC201A-5	200W	500W	360ℓ	¥258,000
HC301A-5	300W	500W	670ℓ	¥321,000
HC401A-5	400W	500W	1000ℓ	¥360,000



低温恒温循環水槽

実験台上でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

形式:CT 65-300-S  
 使用温度範囲:0~50℃(±0.1℃)  
 外形寸法:W420×D330×H340mm  
 槽内寸法:φ153×H187mm  
 冷凍機:65W ヒーター:300W  
 価格:¥250,000



超小型ウォーターバス式インキュベーター

極めてコンパクトにまとめた超小型の恒温槽です。50ml程度のピーカーや小型の試験管数本の恒温を得る用途に適しています。

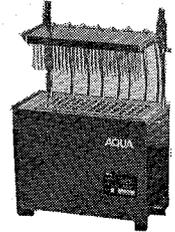
形式:CTH-100(加熱専用型)/CTC-100(加熱冷却型)  
 外形寸法:146×176×h225mm/146×176×h270mm  
 温度範囲:室温+5°~60℃/+5°~60℃  
 温度精度:±0.05°~±0.1℃  
 槽材質:ステンレス SUS304  
 槽内寸法:98×100×h59mm  
 本体価格:¥98,000/¥168,000



ゼットコンデンサー

空気または窒素ガスを試験管内に吹きつけ、溶媒の蒸発を促進し、濃縮時間を短縮する装置です。

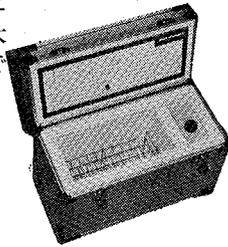
形式:JC 70-300  
 外形寸法:350×191×h540mm  
 槽内寸法:300×120×h70mm  
 温度範囲:室温~100℃±0.4deg  
 吹出ノズル本数:70本  
 ヒーター:300W  
 空気ポンプ:20W  
 電源:100V  
 価格:¥310,000



恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微量にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

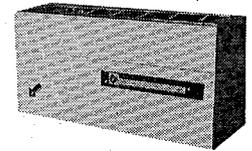
形式:CTC-422  
 外形寸法:407×193×H298mm  
 庫内寸法:246×122×H200mm  
 コントローラー:デジタル設定, デジタル表示  
 価格:¥88,900(蓄冷体-5℃付)



温度勾配装置(ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。振とう装置付きもあります。

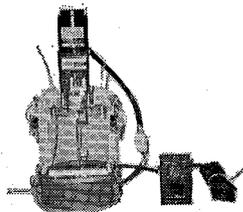
形式:TGW-3(三連)/TGW-5(五連)  
 使用温度範囲:0~50℃  
 温度調節精度:±0.05~±0.1℃  
 槽内寸法:150×260×150×3/×5  
 冷凍機:200W/300W  
 ヒーター:90W×3/×5  
 価格:¥788,000/¥970,000



本城式プランクトン濃縮装置

プランクトンを効率よく回収する装置です。プランクトン細胞の崩壊が少なく、低濃度で分布している種類を観察することができます。ろ過水はプランクトンの体液が混入しない純水なものが得られます。ろ紙の表面は目詰まりしにくく早い流速が得られます。

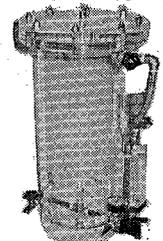
形式:PC15-S  
 回収率:80~95%  
 価格:¥98,000



加圧式インキュベーター

空気または不活性ガスで加圧した環境下で各種生物を培養する装置です。新鮮な空気を常に供給しながら一定圧を保つことができますので安定した培養環境が得られます。

形式:PI 203  
 最大使用圧力:2.5kg/cm<sup>2</sup>  
 内寸法:φ190×h440mm  
 外形寸法:φ280×h530mm  
 本体材質:透明アクリル  
 価格:¥198,000(加圧ポンプは別)  
 給水装置 減圧弁・安全弁付



生細胞の染色に

# 細胞蛍光標識キット

Cell Linker Technology に基づく細胞染色法で、細胞膜に高親和性を持つ新しいタイプの蛍光色素PKH2またはPKH26 蛍光色素と希釈液とを組み合わせた、細胞蛍光標識キットです。

## 細胞機能に影響しません

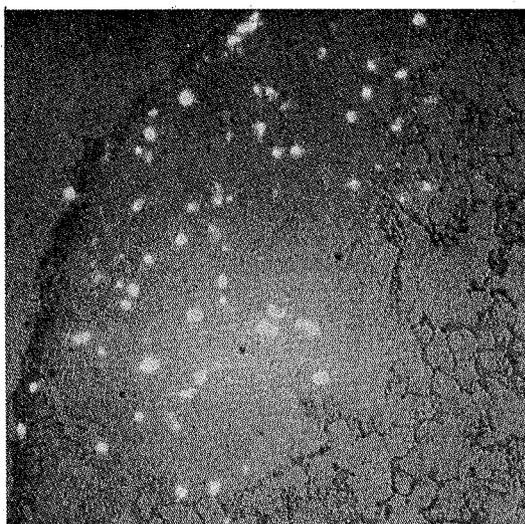
細胞と数分間混合するだけで、生細胞をその機能を損うことなく染色可能で、細胞の移動や増殖のモニタリングに大きな威力を発揮します。

## 簡便です

従来  $^{51}\text{Cr}$  等を用いて行われていた LAK 細胞のモニタリングや NK 活性の測定が簡便に、しかも安全に行うことができます。

## 安定です

ウサギ赤血球を標識した場合、PKH26 では *in vivo* でその溶出の半減期が100日以上を示し、長期のモニタリングが可能です。



Tumor Localization of PKH26 Labeled TILs.

マウス肺癌組織に浸潤している、PKH26で染色した IL-2 処理リンパ球が観察されます。

Photo Courtesy of  
Drs. Per Basse & Ronald H. Goldfarb  
Pittsburgh Cancer Institute, Pittsburgh, PA

発売元



大日本製薬株式会社  
ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94  
TEL 大阪 (06) 386-2164(代表)  
東京 (03) 3828-6544(代表)

# マウスのテラトーマ

森脇和郎／序

野口武彦 村松 喬／編集

—EC細胞による哺乳動物の実験発生学—

定価 3914 円(税込)A5判・296頁・並製

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説してあります。

# 哺乳動物の初期発生

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明

鈴木秋悦 館 輝／編集

—基礎理論と実験法—

定価 15450 円(税込)B5判・480頁・上製

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

# 体細胞遺伝学

山根 績 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

定価 10094 円(税込)A5判・720頁・上製

HVJによる細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換えを使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

**理工学社**

東京都文京区本駒込5-9-10 電話 03(3828)5211(代) 振替口座番号 東京1-34676 〒113

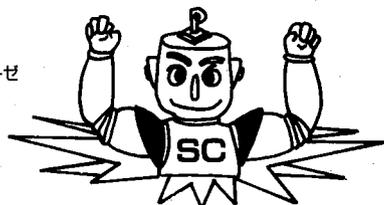
## MERCK 社製 プロテアーゼ阻害剤

# PefablocSC

ベファブロックSC

ほとんどすべてのセリンプロテアーゼを迅速かつ効果的に阻害します。

化学名 4-(2-Aminoethyl)-benzenesulfonyl Fluoride・Hydrochloride



PMSFや  
DFPと比べて

**低毒性** マウス：LD<sub>50</sub> 2800mg/kg

**中性で安定** 半減期(pH7.0, 22°C)：20時間

**水に易溶** 20g/100ml

Cat. No.	製品名	包装
24839-1M	Pefabloc SC ベファブロック SC	生化学用  100mg

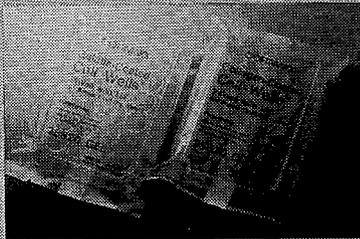
※詳細は下記までお問い合わせ下さい。

**Cica 関東化学株式会社**  
試薬事業本部

本社／〒103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 ☎03(3663)7631  
大阪／〒541 大阪市中央区瓦町2-5-1 ☎06(222)2796  
福岡／〒812 福岡市博多区山王1-1-32 博多堀池ビル ☎092(414)9361

# CORNING BETTER SURFACE PRODUCTS

コーティングの時間と  
コンタミネーションの不安を解消



## ■ファイブロネクチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000FN	ディッシュ 35φ	9cm <sup>2</sup>	10	60
25010FN	ディッシュ 60φ	21cm <sup>2</sup>	10	40
25020FN	ディッシュ100φ	55cm <sup>2</sup>	10	40

○ウシ血漿由来ファイブロネクチン

## ■コラーゲンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000COLI	ディッシュ 35φ	9cm <sup>2</sup>	10	200
25010COLI	ディッシュ 60φ	21cm <sup>2</sup>	10	200
25020COLI	ディッシュ100φ	55cm <sup>2</sup>	10	120
25810COLI	マイクロプレート6F	9.4cm <sup>2</sup>	1	20
25820COLI	マイクロプレート24F	2cm <sup>2</sup>	1	20
25860COLI	マイクロプレート96F	0.32cm <sup>2</sup>	1	20
25100COLI	フラスコ 25cm <sup>3</sup>	25cm <sup>2</sup>	10	60

○ブタ臍由来酸可溶性TypeIコラーゲン

## ■ゼラチンコート製品

コードNo.	規 格	培養面積	個/パック	個/外面
25000GEL	ディッシュ 35φ	9cm <sup>2</sup>	10	200
25010GEL	ディッシュ 60φ	21cm <sup>2</sup>	10	200
25020GEL	ディッシュ100φ	55cm <sup>2</sup>	10	120
25810GEL	マイクロプレート6F	9.4cm <sup>2</sup>	1	20
25820GEL	マイクロプレート24F	2cm <sup>2</sup>	1	20
25860GEL	マイクロプレート96F	0.32cm <sup>2</sup>	1	20
25100GEL	フラスコ 25cm <sup>3</sup>	25cm <sup>2</sup>	10	60

○豚皮由来ゼラチン

※使用に先立ちサンプルによる事前チェックをおすすめします。35%ディッシュ、サンプルパックを用意しておりますので希望の方は本社又は下記支店へご連絡下さい。

## 岩城硝子株式会社

本社第3営業部 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 ☎03(214)6221(直)  
 ●大阪支店 ☎06(362)6291(代) ●名古屋支店 ☎052(211)3855(代)  
 ●九州支店 ☎092(451)5606(代) ●広島支店 ☎082(248)0293(代)  
 ●札幌営業所 ☎011(221)3477(代)